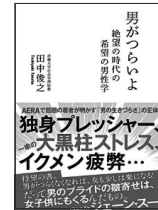


田中俊之著

# 『男がづらいよ 絶望の時代の希望の男性学』

(KADOKAWA、2015 年 224 頁)

金野 美奈子



現在、男性は不安の時代を迎えていると筆者は言う。男性が「普通の男性」として生きるハードルがとてつもなく上がってしまったからだ。「普通の男性」の生き方とはもちろん、学校を卒業すると同時に正社員として就職し、結婚し、家族を養い、40 年ほど勤めあげて定年を迎えるという生き方を指している。

この国の近代の夜明け、欧米諸国からの訪問者を驚かせるゆったりしたリズムで生きていた男性たちは、その後 100 年の歴史の中で競争としての仕事に明け暮れる存在へと変貌した。「グローバル化の進展」、「広がる格差」、「ブラックな労働環境」、「人間関係の複雑化」などにともない、このような男性像が根本的に問い直されているのが現代という時代だろう。

時代の不安を抱えるのは、もちろん男性ばかりではない。だが「普通の男性である」ことへのプレッシャーと、「普通の女性である」ことへのプレッシャーの間には、ある決定的な違いがあると思う。場合によってはあまり期待はされないがそう簡単に社会から排除されることも少ない女性に比べ、男性は、多くを期待されてもだめなら「敗者」や「役立たず」の烙印を押され、見えない存在へと押しやられる。戦後の日本では、男性を徹底的に選別し序列化するしくみに、かつてなく大量の男性たちが巻き込まれてきた。

1975 年生まれ男性である著者は、社会学者として同性の経験を探る研究を重ね、大学で教鞭をとるかたわら、市民講座などでも多くの男性たちの声に接してきた経歴をもつ。男性向け市民講座の受講者といえ、10 年前は定年後の人がほとんどだったのが、今や 30 代、40 代の参加も目立つという。

本書は現代の男性の「生きづらさ」をいくつかの側面から照らし出す。まず「仕事がつらい」。長時間労働をはじめとする日本の職場の現状は、仕事の場により強く縛り付けられてきた男性たちにとって、より大きな困難をもたらす。他の関心よりも仕事を優先することが当然視される職場で、男性たちは自己犠牲の精神をいかに発揮し続けている。嵐がこようが大地震が起ころうが朝 9 時に会社のデスクに座っている男性たちの姿が、それを象徴する。

そして「結婚がつらい」。仕事へのプレッシャーはいつこうに減らないまま、男性にはパートナーシップや家庭生活の面でもっと多くの役割を果たすよう期待されている。「普段はやさしいけど、いざというとき頼りになる」、「一所懸命に稼いでくれて、育児にも協力的」など、女性から男性への、さらに社会から男性への要求水準は高まる一方だ。平成 26 年度男女共同参画週間のポスターに描かれたのは、一瞬にしてスーツを脱ぎ捨てフライパン片手に空を飛ぶ、エプロン姿のスーパーお父さんだった。

さらに「価値観の違いがづらい」。価値観の違いは世代間でとくに顕著に表れる。時代にも支えられ「普通の男性」であることへの期待にまじめに応えてきた昭和世代、1990年代の家庭科男女共修化を経た、「普通の男性」像への疑問を隠さない平成世代、これら二つの世代の狭間で揺れる、著者も属する1970年代生まれの「アラフォー」世代。それぞれがその世代固有の課題を抱え、世代間の軋轢も高まっている。「オタク」「草食」などのレッテルが定着する一方、年長世代はともすればからかいの対象である。

このような「絶望の時代」を生きる男性たちに、筆者は同志として呼びかける。「まずは落ち着いて」。その呼びかけは、恨み節でも「リスク」感を煽りたてるアジテーションでもない。「普通の男性」をめざすこととしての絶望の時代は、男性の新しい生き方を模索する冒険にとっては希望の時代でもある。現代を従来の生き方ができなくなった時代としてではなく、新たな可能性に満ちた時代として捉えようと、筆者は提案する。

とはいえ、本書は大上段に構えた社会変革論ではない。筆者によれば、これは「真面目にふざける」実践であり、現状に生きづらさを感じる男性が一步踏み出すための「ヒント集」である。世界の見方、捉え方を変えるさまざまな提案が、「他の男性と目が合ったら微笑みかけよう」、「仕事着でちょっと冒険しよう」、「花で女性に許してもらおうとするのはやめよう」といった、一見何気ない実践のアイデアで彩られる。「普通の男性」像を作り上げる一つひとつのパーツを小さくゆさぶってみることが、そのような男性像からの解放の入り口となるのだ。

ただし、問題はその先にもある。解放された男性たちはいったいどこに向かえばよいのだろうか。現代は多様化の時代だとして、「あなた自身はどんな生き方をしたいのか」と問いかける道もあるだろう。本書もときにそのようなアプローチに近づいている。だが、こんな漠とした問いにいきなり答えさせられるのは厳しい。その厳しさのあまり、「イクメン」などが「新たな生き方モデル」とされてしまっただけでは（筆者も指摘するとおりの現状そうになっている面もある）元も子もない。

本当の意味で自由な生き方とは、今、自分が生きている生活のディテールと真摯に向き合うこと、今の仕事の状況と、パートナーと、地域と、趣味と、一人の人間として向き合うことから生まれるのではないか——。筆者は軽妙洒脱、かつあたたかな口ぶりで、同性たちにそう語りかける。男性が置かれた社会の構造的背景に目配りしつつも、男性たちを「社会構造の被害者」の位置に閉じ込めない本書は、フェミニズムや女性学の意義も陥穽も、しっかりと見つめてきた人によって書かれたものだと感じる。

では女性には何ができるのか。女性の読者なら、そう問いたくなるかもしれない。男性を追い詰める社会を支えてきた人間の半分は女性だ。だが、ここで「女性として」何かしなければと考えてしまっただけでは逆戻りになる。私たちは、一人ひとりの男性が一人の人間として、仕事の場と、パートナーと、地域と、趣味と向き合おうとしたとき、そのまなごしをあたたく受け止めて、あるいは同じ対象をまなごして寄り添う、やはり一人の人間でありたいと思う。

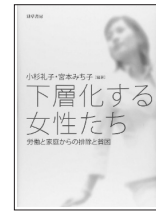
（こんの・みなこ／東京女子大学現代教養学部教授）

小杉礼子・宮本みち子編著

『下層化する女性たち：  
労働と家庭からの排除と貧困』

(勁草書房、2015年 272頁)

慶田昌之



本書は、日本学術会議と労働政策研究・研修機構が共催したシンポジウムの第5回(2013年)と第6回(2014年)の報告者による論文集である。若年女性の社会的排除と貧困化をテーマとして、社会学者、哲学者、社会活動家という幅広い執筆者が寄稿している。

序章の宮本みち子による「課題と設定」の後、第I部「労働と家庭からの排除の現状と課題」に含まれる最初の3つの章は、本書の理論的フレームワークの提示を目的としている。第1章の山田昌弘「女性労働の家族依存モデルの限界」は、本書を通じた大きなフレームワークを提示している。山田論文は本書を通じて繰り返し言及されているので、このフレームワークを確認しておこう。欧米や日本においては、かつては「女性労働の家族依存モデル」が社会の前提であった。「女性労働の家族依存モデル」とは、女性が賃金労働ではなく家庭内の家事労働、または自営業・農業における家族労働を役割として、家族に依存する生き方である。その後、欧米ではフェミニズム運動の影響もあり「女性労働の家族依存モデル」から脱却し、「女性の経済的自立モデル」へと移行した。すなわち、男性も女性も賃金労働をする生き方に変わった。その後、低成長時代となり非正規労働が増加しても低賃金の問題は男性も女性も同じように影響を受けた。日本では「女性労働の家族依存モデル」からの脱却が完成しないうちに経済の低成長時代が到来した。女性にとっては、非正規労働などの低賃金労働が増えたにも関わらず、賃金労働によって自立を目指すという状況が発生した。一部の女性は正規労働に就き賃金労働による「経済的自立モデル」への移行に成功した。一方で、一部の女性は、増加した低賃金労働のために「経済的自立モデル」への移行に失敗し、男性や親世代の経済力が低下したため「女性労働の家族依存モデル」への回帰もできず貧困状態となっている。以上が、山田論文が提示したフレームワークである。

第2章の江原由美子「見えにくい女性の貧困」は、山田論文を受けて「女性労働の家族依存モデル」と「女性の経済的自立モデル」の間で、社会問題として認識されるためには客観的事象を問題として申し立てる言説実践である「クレーム申し立て」の概念を用いて、女性の貧困が見えにくい問題となった理由を説明している。第3章の金井淑子「ままならない女性・身体」は、「若者問題」のジェンダー非対称性として男性の「引きこもり問題」と女性の「メンタルヘルス系問題」を指摘して、若年女性の生きにくさを説明する。

第II部「貧困・下層化する女性」に含まれる2つの章は、貧困女性を対象とした調査からの報告である。第4章の丸山里美「女性ホームレスの問題から」は、女性は野宿者ではない「隠れたホームレス」の形態をとった貧困が多いことを指摘し、「隠れたホームレス」に関するいくつかの調査を分析している。若年女性の貧困については、本人の知

的・発達障害、虐待されている、あるいは親が障害者である、などの困難な状況があることを指摘している。第5章の山口恵子「折り重なる困難から」は、3人の貧困女性のケースについて報告している。それらのケースは、経済的な貧困だけではなく人間関係的な貧困があることを指摘している。

第Ⅲ部「支援の現場から」に含まれる3つの章は、支援活動に基づく報告である。第6章の遠藤智子「「よりそいホットライン」の活動を通じて」は、無料の匿名電話相談への相談内容を分析し、若年女性の貧困と性暴力被害が密接に関連している実態を報告している。第7章の白水崇真子「生活困窮状態の一〇代女性の現状と必要な包括支援」は、大阪府豊中市における支援活動における困窮状態に置かれた10代女性の実態の報告であり、自尊感情が育たないまま困窮状態に置かれた若年女性は、「私がないと困る」相手がいることを「自分でも生きていい証」と見なし、理不尽な関係からも逃げられなくなるという心理的傾向を指摘している。第8章の小園弥生「横浜市男女共同参画センターの“ガールズ”支援」は、若年無業女性が人間関係やメンタルヘルスの問題を複数抱えており、これに対応すべく就業支援講座と就労体験を実施した結果を報告している。

以上の論文のほか、各部の最後にコラムと呼ばれる直井道子、本田由紀、小杉礼子による短い論考が収録されている。

本書を通じて山田論文に対する言及があり、山田論文で提示されたフレームワークが執筆者らの間で共有されていることが分かる。一方で、4章以降の貧困女性の調査や支援現場からの報告は、貧困女性たちが人間関係のトラブル、DVその他の暴力、性的搾取、メンタルヘルスの問題など、非常に広い意味での「関係性の困難さ」に直面している事実を描き出している。広範囲の事例が紹介されていることを考慮すると、この「関係性の困難さ」の共通性は印象的である。4章以降の執筆者らが、それぞれ貧困女性の自立の困難さに言及していることも注目される。

本書が大きなフレームワークを提示しつつ、具体的な貧困女性の実態に迫ることで「関係性の困難さ」という特徴を示した点は、大きな貢献である。幅広い論者を集めた議論の結果として高く評価される。その上で、この大きなフレームワークと「関係性の困難さ」がどのように関係しているのか、その間にあるメカニズムは何かについて、本書の議論において必ずしも明確に述べられていない。

明確に述べられていないものの、本書を通じて私が最も興味深いと感じた点は、4章以降の各章の事例研究で挙げられる貧困女性たちが、「女性労働の家族依存モデル」を希求しているように見える点である。山田論文が強調するように「女性労働の家族依存モデル」への回帰は難しい状況である。にもかかわらず、過去のモデルへの回帰を希求することは、その依存的な関係を基礎とするモデルであるがゆえに「関係性の困難さ」を発生させ貧困状態を複雑なものにさせているように見える。その意味で、女性たちの過去のモデルへの回帰を望む心の問題を浮かび上がらせ、フレームワークと「関係性の困難さ」の間を繋いでいると読むことができるのかもしれない。もちろん、なぜ一部の女性たちが過去のモデルへの回帰を望んでいるのかについては、今後の研究の課題であろう。

(けいだ・まさゆき／立正大学経済学部専任講師)